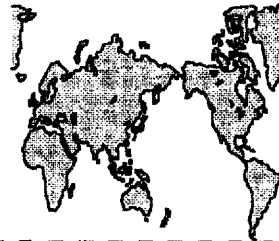


北海道

国際理解教育研究協議会

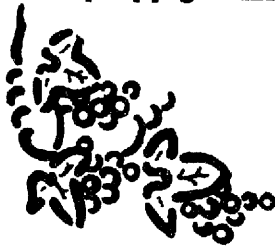


会報

第42号

国際理解教育全道大会を開催して

国際理解教育研究大会後志大会実行委員長
余市町立東中学校長 菊池 忠 敬



後志の最も美しく良い季節、余市町にとっては、店頭で果物が顔を並べ甘酸っぱさが街中に漂う最もおいしい時期に、全道から350余名の先生方をお

迎えして国際理解教育研究大会が開催され、とどこおりなく終了し、今は、授業会場校として、各校の児童生徒も先生方も、成し遂げたという充実感でいっぱいです。そして、新たな歴史を刻んだ2日間だったと思います。

本会は3年ほど前から道の要請を受け、今回の全道大会開催に向け会員が中心となって努力して参りました。

後志国際理解教育研究会は発足して間もないことや、会員相互の研修の取り組みもまだまだ十分であったとはいえない状況でしたが、全道大会をお引き受けすることで、会としての組織や活動を確立させ、研究に一層の拍車をかけられるのではないかと、この考えから今回の開催に至りました。

この度の大会の特色をこれまでの道の研究の流れや、後志の研究の推移をかみ合わせながら、

- ①地域の素材を生かした国際理解教育
- ②様々な教科や特別活動で国際理解教育の視点から実践
- ③国際理解教育を通して次の総合的な学習に方向性を持っていく

と抑え、研究・実践を重ねてきました。

これまでの全道大会のように、生涯学習の中で国際理解教育の視点からの授業を行いたいと考え、幼稚園から高校まで授業を行っていただきました。いずれも新たな教育の流れであり、そこには世界との出会いもあり、自国の文化理解から世界理解へと思考や視野を広げた内容でした。

分科会では、新しい教育のうねりを勉強しようとする熱気で会場は参加者であふれる始末。アトラクションでは、毎年全道コンクールで金賞を受賞している東中吹奏楽部と余市パイピングソサエティ(バグパイプ)の見事な共演。講演は、杉岡昭子氏による「余市から世界が見える～国際交流の方程式～」という演題で、余市のもつ歴史、自然、人々のすばらしさを大切にしながら、世界に目を向けることの大切さをお話していただきました。どの参加者も新しい教育の胎動を感じ、この研究会の成功を確信いたしました。

これまでご指導、ご支援をいただいた北海道教育委員会をはじめ北海道国際理解教育研究協議会、また、関係各位に改めて感謝とお礼を申し上げます。

理事会総会終わる

去る10月22日、国際理解教育後志大会の全体会場(余市町中央公民館)において、『平成10年度 北海道国際理解教育研究協議会 理事会総会』が開催され、今後の活動等について決定しました。

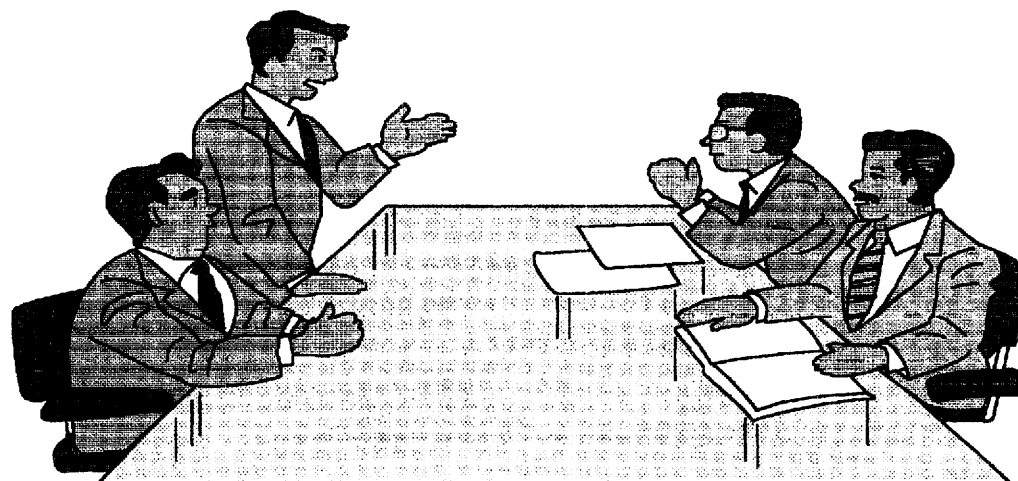
〈報告事項〉の中では、「第19回全道研究大会後志大会」について、菊池会長から報告があり、その後、来年度「第20回全道研究大会網走(北見)大会」の準備状況について、関会長より報告がありました。

〈審議事項〉では、次の3点について、可決・承認されました。

1. 平成10年度「派遣教員研修会・帰国教員報告会」について(本会報参照)
2. 道協議会のインターネットへの接続について(本会報参照)
3. 平成12年度研究大会開催地について…胆振地区で開催する方向で。
4. 次期理事会総会について

○開催日時 平成11年1月14日(木) 10:00~12:00

○会場 札幌市立真駒内緑小学校(派遣教員研修会・帰国教員報告会 会場)



平成10年度

「派遣遣教員及び帰国教員研修会」開催要項

北海道国際理解教育研究協議会

1. 目的
- 平成11年度在外教育施設派遣教員として本道より派遣される教員に対し、在外教育施設や教育の現状や現地での生活の様子及び派遣に係わる準備等について研修し、派遣教員としての自覚の高揚と資質の向上を図る。
 - 平成10年度帰国教員より在外施設における教育の実状及び現地での教育実践等についての報告や協議により、派遣教員の現地での教育活動への示唆を与えるとともに今後の本道における国際理解教育の充実に資する。

2. 主催 北海道国際理解教育研究協議会

3. 後援 北海道教育委員会

4. 対象者 平成11年度在外教育施設派遣教員
平成10年度在外教育施設帰国教員
本協議会会員及び派遣教員の家族

5. 期 日 平成11年1月14日(木) 13:00~17:00

6. 会 場 札幌市立真駒内緑小学校
札幌市南区真駒内幸町2丁目
TEL 011-582-2131 FAX 011-582-2053

7. 日 程

12:30 13:00 13:15 13:45 13:55 15:25 15:35 17:00 17:10 18:00 17:30

受開 会 付式	[全体会]《講話》 ・帰国教員の役割 ・派遣教員の心構え	移 動	[実践発表] ・現地での実践 ・協議、質疑	移 動	[派遣地域別研修会] ・現地での生活の様子 ・協議、質疑	閉 会 式	移 動	[激励会] ホテル札幌会館
---------------	------------------------------------	--------	-----------------------------	--------	------------------------------------	-------------	--------	------------------

※ 研修会終了後、地下鉄南北線にて移動し、今年度の派遣者の「激励会」をホテル札幌会館にて行います。

ホテル札幌会館 北区北17条西4丁目 TEL 726-1341

参加申込み

札幌市立真駒内南小学校
後藤 宏 事務局次長 宛
〒005-0015 札幌市南区真駒内泉町3丁目13-1
TEL 011-581-0221
FAX 011-581-6927

網走地区研究の歩み

網走地区研究部

I 網走地区研究主題

国際社会に生きる人間性豊かな児童生徒の育成
～学校や地域社会における国際理解教育をどう進めるか～

II 研究主題設定理由

地球のボーダレス化が進みインターネットによる情報通信網が整備され、教室と世界が直結する国際社会が進展し、地球規模でものごとを考え、自ら発信し実行する時代を迎えている。学校教育においては、今年の7月の教育課程審議会の答申の中で、『総合的な学習の時間』を設置し、その学習の一環として小学校では英会話導入が可能となり、中学校では外国語学習が必修科目となることが提言されている。

このような状況を踏まえ、国際社会に生きる日本人としての誇りを持ち、たくましく生きる人間の育成は、重要な教育課題である。

本研究会として、これまで『人間尊重の精神』『日本の文化・伝統の理解』『外国の文化・伝統の理解』『コミュニケーション能力の育成』の四点を国際理解教育の目標として位置付け、『いつでも、どこでも、だれもができる国際理解教育』を目指して、『国際理解教育基底カリキュラム』の作成とともに、毎年研究大会を開催して実践検証に取り組んできた。その研究の成果を継承しつつ、時代の要請に応える国際理解教育の推進を期して本主題を設定した。

III めざす子供像

広い視野をもち、たくましく生きる子

豊かな社会性をもつ	違いを認めて理解しあえる	主体的に自分を表現できる
・協力・協調の重要性 ・人権・生命の尊重 ・平和・友好の態度及び環境への関心	・自国理解 ・異文化理解 ・相互依存関係理解	・思考力・判断力 ・自己表現力・行動力 ・コミュニケーション能力

IV 研究の視点

- 1 基本目標の設定〔全道第6次研究との関連、これまでの四目標の再検討、等〕
- 2 総合的な学習を視野に入れた国際理解教育の推進
- 3 子供たちが、主体的に学習し、表現し、行動する授業づくり

V 研究の実際

1 研究の経過

昭和61年に、網走管内国際理解教育研究会設立準備会議が行われ、当時の参加者は、わずか6名という小人数で本研究会が設立され、翌62年に第1回目の研究大会が北見市立北光小学校において32名の参加を得て開催された。これが、本研究会の出発における第一歩であった。

以来、毎年管内各地区での研究大会を積み重ね、平成2年には、『国際社会に生きる日本人の育成』をテーマに掲げて全道国際理解教育研究大会を網走市において開催するに至った。参加者530名という大規模の研究大会となり、国際化が進展する時代にふさわしい貴重な研究大会であった。平成3年には、本研究会の成果と実践を集約した『国際理解教育基底カリキュラム』を作成し、全道各支部に配布することができた。以後も、『研究大会』の開催、在外教育施設『帰国報告会』、派遣希望教員研修会、等の地道な研修を積み重ねてきた。

平成11年度は、全道国際理解教育研究大会を再び網走管内北見市において開催することとなり、現在、『総合的な学習』を視野にいたした授業づくりを中心に、準備を進めているところである。

2 授業の実践例

《 実践例 1 (平成9年度小清水小学校における国際理解教育実践例) 》

(1) 題材名 『英語で遊ぼう』(「学級活動」)

(2) 題材目標

- ① 身近な話題に関心をもち、簡単な英語表現で自分らしさを表現することができる。
- ② ゲームを通して、協力し合って英語で楽しく遊ぶことができる。
- ③ 外国の文化について知り、外国の生活の一端を理解する。

(3) 主体的に表現する力をつけるための教師の支援

- ① ALTとのT-T授業により、興味・関心・意欲を高める授業を工夫する。
- ② 個を生かす授業に努める。
- ③ 体験的な活動の場を設定して、自己表現力を育成する。
- ④ 望ましい集団活動を育成する。

(4) 本時の展開 (別紙参照)

《 実践例 2 (平成10年度訓子府中学校における国際理解教育実践例) 》

(1) 題材名 『ジムの学校』(「英語科」)

(2) 題材目標

- ① 身近な生活の『買い物』を通して、必要なことがらを表現することができる。
- ② 達成感、成就感のある「わかる授業」をつくる。
- ③ 外国の文化について知り、外国の生活の一端を理解する。
- ④ ALTの複数活用により、生徒一人一人が意欲的に学習することができる。

(3) 本時の展開 (別紙参照)

児童の活動	教師の支援
<p>楽しそう (わくわく)</p> <p style="text-align: center;">英語で遊ぼう</p>	<p>あいさつを通して『英語を楽しむ』雰囲気をもたせる</p>
<p>ALTの質問に英語で 答えてみよう</p>	<p>簡単な会話を通して英語の 雰囲気に慣れる</p>
<p>どうやって遊ぶんだ ろう</p> <p>先生におしえて もらおう</p> <p>ヒントを聞こう</p> <p>ゲームをやって みよう</p> <p>次のゲームは何 だろう</p> <p style="text-align: center;">ゲームをしたいな</p>	<p>‘Simon says’ のゲームを 紹介する</p> <p>JTE とALT でゲームの デモンストレーションを 示す。</p>
<p>‘I like ～.’ の 意味がわかった</p> <p style="text-align: center;">ゲームができた</p>	<p>ALT の趣味をJTE との会話 を通して、想像させる。</p> <p>① ‘I like ～.’ の表現 に注意させる。</p> <p>② ‘What food do you like?’ の表現を聞き取 らせる。</p>
<p>自分の好きなものを いってみよう</p> <p>いっぱい質問しよう</p> <p style="text-align: center;">インタビューゲームを したいな</p>	<p>友達やALT と英語で会話す る楽しさをもたせる</p>
<p>どんなクリスマス かな</p> <p style="text-align: center;">ビデオを見よう</p>	<p>外国の文化について知らせ る</p>
<p>外国のことを質問 してみよう</p> <p style="text-align: center;">外国のことも知りたいな</p>	<p>New Zealand のクリスマス について知らせる</p>
<p style="text-align: center;">次の時間はもっと楽しく 遊ぼう!</p>	<p>外国の文化などを紹介し、 理解し合う雰囲気をお大切 にする</p>

実践例 2 『ジムの学校』（本時の展開 1年英語科）

段階	学習内容	教師の活動	生徒の活動	形態	備考
課題設定 (17)	<ul style="list-style-type: none"> ●挨拶 ●基本文の復習確認 ●日米文化の比較 ●本時の課題提示 ●課題把握 	<ul style="list-style-type: none"> ◎Greeting in English. ◎自分の日課について発表させる ◎アメリカの文化に関する質問をする。 ◎本時の課題を提示する。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> 値段のたずね方とその答え方 </div> <ul style="list-style-type: none"> ◎ショートストーリーを行う。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> □ □ is this ? It's six dollars. </div>	<ul style="list-style-type: none"> ★Greeting in English. ◎自分の日課を発表する。★2名 ◎各自、質問の答えを考える ★本時の課題を知る。 ★ショートストーリーを見る 	一斉	<ul style="list-style-type: none"> ◇明るい雰囲気ですリラックスして発表させる。 ◇黒板に掲示する ◇数字の言い方に注意する。 ◇黒板に掲示する
解決の予想・手続 (2)	●課題解決の予想	◎□の中に入りが、予想させる。	★How muchと答える	一斉	◇生徒の出たきた答えを板書する
解決・努力 (18)	<ul style="list-style-type: none"> ●課題解決 ●基本文の暗唱 ●解決の努力 ●実践練習 	<ul style="list-style-type: none"> ◎ How muchはどんな時に用いるのか考えさせる。 ◎基本文を提示、暗唱させる。(意味を確認させる) ◎自己表現させる。 ◎How much を使った質問をする EX. (T) How much is this book ? ◎実際にお店を開く。 5つの店(靴・本・録音機・ビデオ) 	<ul style="list-style-type: none"> ★ものの値段をたずねるときに使う。 ★基本文を暗唱する。 ★名詞、数字をかえて言う。 ★先生の質問に答える。 (S) It's only five dollars. ★実際にお金を使ってものを買ってみる。 	個人	◇イントネーションに注意させる
定着・習熟 (5)	●How much の問題	<ul style="list-style-type: none"> ◎練習問題をさせる。 ◎解答する。 	★本時の学習をいかして解答する。	個人	<ul style="list-style-type: none"> ◇ビデオを見て解答する。 ◇プリント配布 ◇机間巡視をし適切に助言する。
応用評価 (3)	<ul style="list-style-type: none"> ●本時のまとめと評価 ●次時予告 ●挨拶 	<ul style="list-style-type: none"> ◎学習のポイントを確認させる。 ◎自己評価をさせる。 ◎Greeting in English. 	<ul style="list-style-type: none"> ★自己評価表に記入する。 ★Greeting in English. 	一斉 個人 一斉	<ul style="list-style-type: none"> ◇一人ひとりに成就感を与える。 ◇用紙配布、回収 ◇明るく元気な挨拶で終わる。

－ 空知地区における国際理解教育の取り組み －

1、本会のあゆみについて

北海道教育委員会は、昭和46年4月より、第1回在外教育施設への教員の派遣が始まりましたが、以来、毎年北海道からの派遣が行なわれています。空知管内からは、昭和47年4月の本田哲也先生（クウェート日本人学校、現在由仁町在住）以来ほぼ毎年の派遣が続きます。昭和52年1月、北海道教育委員会主催による海外日本人学校派遣教員研究協議会が開催され、それを機に北海道海外子女教育教師の会が結成されました。

その後、在外教育施設に派遣される教師の増加や国際理解教育の具体的な実践が強く求められる状況となり、昭和62年に北海道海外子女教育教師の会は北海道国際理解教育研究協議会と改称されました。そのため、空知においても、帰国教師の会から脱し、より具体的で日常的な国際理解教育を目指して、空知国際理解教育研究協議会と名称が変わり、会則が整うこととなりました。

2、平成9年度までの国際理解教育の取り組み

道の第5次研究を受け、研究主題を

「広く世界に目を開き、豊かに・たくましく生きる児童・生徒の育成」

とし、副主題を

「共生の意識を培う国際理解教育の試み」

として実践化を図ってきました。

研究大会に授業研究を取り入れたのは平成7年度からとなっています。

9年度にはそれまでの実践と研究を紀要の形でまとめることができましたが、その中では「目標系列の一覧」を掲載することができました。それは平成6年度の石狩大会で提案された、中村保氏（道立研究所）による国際理解教育の目標がもとになったものです。それらは釧路大会で基本目標として押さえられ、目標系列の一覧として、各学年の具体目標まで提示されたものでした。本会ではそれらの成果を採用させていただきました。

この目標系列のおかげで、会員の先生方は共通の理論基盤に立つことができ、安心して実践に取り組むことが期待できるようになりました。

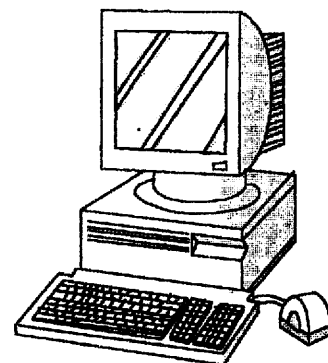
これまでの実践としては、海外での体験を教材化したもの、既存の教材を国際理解教育に教材化したもの（英語や国語等）、海外の学校との児童・生徒の交流事業（インターネットの活用を含む）の実践などが挙げられます。

3、今後の課題

目標系列が明らかになった現在、今後は児童の実態は見取りながら、それぞれの教材、単元で子どもたちにどんな力をつけさせたいのかを明らかにしながら、国際理解教育の教材化を図り、それらの実践を蓄積していくことと、札幌などの先行研究を参考にしながら総合的学習の取り組みについても今後研究を進めていくことが大切であると押さえています。

また、組織的には空知は地理的に大変広いため、各市町村の学校との連携も国際理解教育の広がりを持たせる上で必要となってきています。

海外からのお便り



以下、これまで、事務局にお寄せいただいた海外からのお便りです。

どの通信文もカルチャーショックの中でその感動をありのままに綴ったものであり、海外の事情を知る上で貴重なものとなっています。

お便りをお寄せいただいた先生方に、感謝いたします。

なお、本文をご覧になりたい方は、事務局までお問い合わせください。

事務局 札幌市立西岡小学校 校長 高橋 承造
札幌市立豊平区西岡2条9丁目1-1

TEL011-851-9673

FAX011-851-2564

カンガルー・ポスト シドニー日本人学校 馬場 信明 先生

- ・ No. 24 1998年5月25日付 「入学式」
- ・ No. 25 1998年5月25日付 「こいのぼり集会」「ANZAC DAY(戦争を忘れない日)」他
- ・ No. 26 1998年7月10日付 「オープンウィーク」
- ・ No. 27 1998年7月10日付 「総選挙 ワンネーション党の大勝利」他
- ・ No. 28 1998年8月20日付 「危機への対応を考える(水道に寄生虫、自動車の盗難)」
- ・ No. 29 1998年8月20日付 「石炭の露天掘り炭鉱見学会」

ABU DHABI NEWS アブダビ日本人学校 堀 秀樹 先生

- ・ No. 4 1998年5月27日付 「新学期開始」「U. A. Eの教育システムの変更」
- ・ No. 5 1998年9月15日付 「U. A. Eの交通事情」

マインのほとり フランクフルト日本人学校 柿森 淳一 先生

- ・ No. 1 1997年8月10日付 「フランクフルトの紹介」「春の遠足」
- ・ No. 2 1998年8月12日付 「運動会」「中学部『ホームステイ』」
「国際理解に関わる実践(修学旅行、ドイツ語交流、仮装祭り他)」

MADRID通信

マドリッド日本人学校 古里 和雄 先生

- ・ No. 6 1998年6月27日付 「カルナバル」
- ・ No. 7 1998年8月31日付 「アルタミラ洞窟の壁画を見学」
「マグロの水揚げ」

ESPAÑOL

マドリッド日本人学校 西保 俊太郎先生

- ・ No. 19 1998年5月 日付 「平成10年度スタート」
- ・ No. 20 1998年6月 日付 「風車」「ドン・キホーテ」
- ・ No. 21 1998年7月 日付 「パンプローナの牛追い祭り」
- ・ No. 22 1998年8月 日付 「移動教室」

写真便り

ハノイ日本人学校 佐々木新次郎先生

1998年7月22日付



全校児童生徒と教職員、スクールスタッフ



ヴェトナム列車体験旅行（板の座席と扇風機の車内）

I E フォーラム

2002年に向けて総合的な学習の導入の道筋も明らかになり、具体化に向けての活動が益々盛んになっている。特に小学英語は注目をあび指導書や雑誌も多く出版されるようになった。研究開発指定校の実践をみると①会話中心・活動中心②楽しく活動する時間③評価はしないなど指導についてのある程度の基本的な考えはできあがり、子供たちのニーズに基づいた内容構成が望まれるようである。

しかし、指導時間をどうするのか、だれが教えるのか、そしてどんな題材を設定するかなど具体化にむけて解決しなければならない問題が山積しているといえる。特になぜ「英語」なのかという問いに対して明確な答えははっきりしていない。

このままでは、めざす子供の姿がはっきりしないまま英語が導入され、現場が混乱する状況がうまれるのではないかと心配である。

☞☞☞☞ 図 書 紹 介 ☞☞☞☞

異文化トレーニング

—ポードレスの社会を生きる—

八代 京子 (やしろ きょうこ)

町 恵理子 (まち えりこ)

小池 浩子 (こいけ ひろこ)

磯貝 友子 (いそがい ともこ)

三 修 社

著者紹介 八代京子 1945年生まれ 麗澤大学教授 英語教育の立場から異文化コミュニケーションについて研究している

町恵理子 1958年生まれ 麗澤大学助教授 英語教育の立場から異文化トレーニングについて研究している。

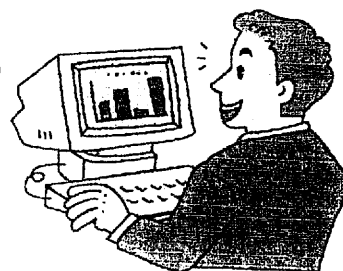
小池浩子 1960年生まれ 聖学院大学非常勤講師 コミュニケーション研究に根差した異文化間交流について研究している

吉田友子 1967年生まれ 慶応大学専任講師 異文化のギャップに悩む人々に対してどうカンセリングするか研究している。

国際交流を進むにつれ、文化背景の異なる人々と出会うことも多くなった。しかし、その人々の持つ多様性を上手に受け入れられる社会になったとはいいがたい。本書では、文化の異なる人々と友好的でかつ建設的な共生を成し遂げるためのコミュニケーションするにはどのような態度やスキルが必要なのかを解説し、実際にそのような態度を養成し、スキルを習得するための訓練の問題を多数収録している。

この本は、教育書というよりビジネス書のため、また著者たちが長く英語教育に携わっていることからどちらかというと英語教育のための本といえなくもない。しかし、子供たちが異文化を受け入れ交流するために、教育現場ではいったい何をすべきなのか、そしてどうすればいいのか示唆を多く与えてくれる本である。

メールアドレスの取得について



本会では、

①国内外の会員相互の効率的な意見交流

②各地区との連絡調整

③在外教育施設派遣教員への会報の送付と連絡 等を目的としたインターネットメールのアドレスを11月上旬に取得致しました。つきましては、今年度は以下のような方法で、利用を開始したいと考えております。

1. 会報の発送

3回目の会報(99年3月)から、なるべく多くの在外教育施設と、道内会員のアドレス取得者に対し、テキストファイルとして編集した会報をメールにて発送する計画です。

2. メールの転送

事務局宛に送付されたメールについて、意見や要望については、登録した会員に転送する予定でおります。

3. アドレス

メールアドレス `Kokusai-spk@col.hi-ho.ne.jp`
文字はすべて英数半角

4. サーバー

サーバーは当分の間、研究部副部長 札幌市立みどり小学校 廣島 直 が担当いたします。メールソフトは OUTLOOK EXPRESS を利用しておりますので、テキストファイル以外で送付される場合は、対応ソフトにて送付願います。また、一太郎9、OFFICE97等に対応しておりますので、添付ファイルとし、送信していただいても結構です。

在外教育施設派遣中の会員の皆様へ

各在外教育施設においては、文部省の整備事業に伴い、パソコン設置及びインターネット接続が完了しているものと思います。つきましては、3回目以降の会報の発送を以下の通りさせていただきます。ご連絡お願い申し上げます。

①自己アドレスをお持ちの先生……

アドレス名をメールにてご連絡ください。テキストファイルにて発送いたします。

②自己アドレスをお持ちでない先生……

学校のサーバー(パソコン)のアドレス名をご連絡ください。以後の会報は、メールにて学校へ「件名」に先生の個人名を書き込み、発送いたします。プリントアウトしてお読みください。

* 道内会員の皆様は……

メールアドレスをご連絡ください。転送希望の有無、メール会員一覧表への記載の可否、会報発送の方法等について回答いただき、対応いたします。なお、発送に際しましてはすべてBCCにて行う予定でおります。また、各地区との連絡調整にも利用したいと考えております。

また、メールの今後の効率的な利用法につきましてもご意見をお待ち申し上げます。